



ちを焼いた人は、死後、餓鬼道に生まれます。

れません。

◇施餓鬼法要

そこで、今こそ餓鬼の姿と

あるとき、夜遅くまで瞑想していたこととです。一匹の餓鬼がいます。口からチロチロと炎を吐いています。名を焰口といひます。焰口餓鬼が阿難に向かつて言ひます。「三日後に、あなたの命が尽き、死んだ後、餓鬼の世界に生まれるだろう」

ノウマクサラバ タタギヤ タバロキテイ オンサンバラサン  
「この陀羅尼は、前世に修行者として生きていたとき、観音菩薩様より直々に授かった陀羅尼で、これを七遍唱えれば、たとえ百万無数の餓鬼や諸大徳、仙人がいようと、それぞれにマカダ国の枡で七七（四十九）石の飲み物や食べ物を施し、十分満足していただけるだろう。そして、餓鬼は浄土に生まれ変わって、その功德によって、供養した人の寿命は延び、健康に恵まれ、福徳と知恵を備え、大いなる繁栄を遂げるだろう」とおっしゃって、さらに、

ち破つて、健康で、はつらつとした姿になりますように」  
南無甘露王如来 灌法身心  
令受快樂（ほとけさまの教えをシャワーのように浴びて、身も心も軽く爽やかになれますように）  
南無廣博身如来 咽喉広大  
飲食受用（喉が大きくなくて、施された食べ物が思う存分いただけますように）  
南無離怖畏如来 恐怖悉除  
離餓鬼趣（恐怖が取り除かれ、悩み苦しむ心からスツカリ解放されますように）

餓鬼の姿は醜く、身長は三尺ほどで、怒りに目は血走り、髪の毛はぼうぼう、爪はのび放題で、一度つかんだ物を放さない恐ろしさです。喉は針の先ほど細く、お腹は山のようにふくれあがり、中は空っぽ。飲み物や食べ物をお口に運ぶと、火になって燃えてしまい、口に入れることができません。満たされることのない永遠の欲求不満。それが餓鬼の姿であり、その悲しみと苦しみに責め立てられるのです。

餓鬼は、荒唐無稽な作り話ではありません。物欲や名譽欲から来るところの欲そのものが餓鬼の正体です。餓鬼は全く他人事ではなく、私たちの心の中にも餓鬼がいて、私たちの内面を迷わせ、隙があれば餓鬼の世界に引きずり込もうと狙っています。人の好意を素直に喜ばず、真実と反対に理解し、自分も他人も苦しめる自我意識の高い人など、すでに餓鬼の仲間かも知れません。

このとき、餓鬼道に落ちて、飢えと渇きにさいなまれる餓鬼たちに、幾ばくかの飲み物や食べ物や施し、お経や陀羅尼をと覚えて供養し、それによつて得られた功德をご先祖さまに廻向するのです。これが施餓鬼法要のねらいです。それでは施餓鬼法要とはどのような法要なのでしょう。まずは施餓鬼の由来を尋ねたいと思ひます。お釈迦様の弟子に阿難という人がいます。

阿難はすぐさまお釈迦様の所にはせ參じ、どうすればこの苦しみから免れるのか教えを請ひます。お釈迦様は「何も恐れることはない」とおっしゃって、阿難に陀羅尼を授けました。

ねんごろな施餓鬼の供養を受けた餓鬼は、物惜しみをし、狭くなった心の障害が取り除かれ、福徳と智慧が満たされます。醜い姿が打ち破られて、健康を取り戻します。みほとけさまの教えを身と心とに浴びて、快く楽しくなります。喉が大きくなくて、施された食べ物を思う存分いただけます。恐怖が取り除かれて、餓鬼の悩み苦しむ心から解放されて自由になれます。

餓鬼は、荒唐無稽な作り話ではありません。物欲や名譽欲から来るところの欲そのものが餓鬼の正体です。餓鬼は全く他人事ではなく、私たちの心の中にも餓鬼がいて、私たちの内面を迷わせ、隙があれば餓鬼の世界に引きずり込もうと狙っています。人の好意を素直に喜ばず、真実と反対に理解し、自分も他人も苦しめる自我意識の高い人など、すでに餓鬼の仲間かも知れません。

阿難はすぐさまお釈迦様の所にはせ參じ、どうすればこの苦しみから免れるのか教えを請ひます。お釈迦様は「何も恐れることはない」とおっしゃって、阿難に陀羅尼を授けました。

ねんごろな施餓鬼の供養を受けた餓鬼は、物惜しみをし、狭くなった心の障害が取り除かれ、福徳と智慧が満たされます。醜い姿が打ち破られて、健康を取り戻します。みほとけさまの教えを身と心とに浴びて、快く楽しくなります。喉が大きくなくて、施された食べ物を思う存分いただけます。恐怖が取り除かれて、餓鬼の悩み苦しむ心から解放されて自由になれます。

南無過去宝勝如来 除慳貪  
業福知円満（物惜しみをし、心が狭くなったことによる障害を取り除いて幸せになれますように）  
南無妙色身如来 破醜陋形  
円満相好（醜い餓鬼の姿を打破つて、健康で、はつらつとした姿になりますように）  
南無甘露王如来 灌法身心  
令受快樂（ほとけさまの教えをシャワーのように浴びて、身も心も軽く爽やかになれますように）  
南無廣博身如来 咽喉広大  
飲食受用（喉が大きくなくて、施された食べ物が思う存分いただけますように）  
南無離怖畏如来 恐怖悉除  
離餓鬼趣（恐怖が取り除かれ、悩み苦しむ心からスツカリ解放されますように）

ねんごろな施餓鬼の供養を受けた餓鬼は、物惜しみをし、狭くなった心の障害が取り除かれ、福徳と智慧が満たされます。醜い姿が打ち破られて、健康を取り戻します。みほとけさまの教えを身と心とに浴びて、快く楽しくなります。喉が大きくなくて、施された食べ物を思う存分いただけます。恐怖が取り除かれて、餓鬼の悩み苦しむ心から解放されて自由になれます。

を供養するばかりか、百千万無数の仏様を供養することによって生じる功德と何ら変わらぬ、餓鬼も仏様も全く優劣がないとされています。ですから、供養を受けた餓鬼は天であるいは浄土に生まれ変わります、供養を施した人々は、長寿で健康に恵まれ、日に日に力がみなぎって、福德と知恵を増し、大いなる繁栄を遂げるとされています。

◇弘法大師のみ教え

お釈迦様から施餓鬼の法を授けられた阿難は、さつそく施餓鬼を行なったところ、百二十歳まで寿命を保ち、修行を完成し、ついに悟りを得たといわれています。ほかに、この施餓鬼の法を修行した多くの人々が、計り知れない功德を得たといわれています。嬉しくて嬉しくて、ついには踊り出し、手の舞い、足の踏むところを知らず、嬉しさのあまり舞い踊ったそうです。それが、きまつて毎年お盆に盛んに行われたものから、「盆おどり」といわれるようになり、とくに鳴門結衆のお寺では、この時期にこ

ぞつて施餓鬼法会を厳修するものだから、施餓鬼の功德が拡がって、ますます盆踊りが盛んになり、ついに日本三大踊り「阿波踊り」として、全国にその名を轟かすまでになつたと聞き及んでいます。

実は、弘法大師によつてわが国に請来されたといふことは、あまり知られていません。空海上人は、延暦二十三年（八〇四）年七月六日に九州肥前国田ノ浦を発つて入唐し、唐の長安青龍寺の恵果阿闍梨から密教の正系を受法し、経論・仏像・曼荼羅・法具などをたずさえて、大同元年（八〇六）十月頃に帰朝しました。そしてこの年十月十二日に唐より持ち帰つた経論などの目録を、空海上人自ら記録し、朝廷に献上したのが、いわゆる『請来目録』です。この中に施餓鬼を説く經典『施餓鬼陀羅尼經』が含まれています。また空海上人が唐から持ち帰つた『三十帖策子』にも自ら書き写した

施餓鬼の作法（『施諸餓鬼飲食及水法并手印』）が含まれており、これらをベースにして、現今の真言宗の施餓鬼法が組み立てられています。私たちがお寺の施餓鬼法会に参列することは、施食棚に集まつた餓鬼に布施をするのとですが、それは同時に自分たちの中の餓鬼に供養することになるのです。苦しんでいるものや餓鬼に布施をするところが、自分の心の中に棲みついた餓鬼の心をこの世の生き仏である菩薩の心に変えていく、最も効果的な行為です。

弘法大師のお言葉に  
苦を見て悲を起こすは観音の用心 危きを視て身を忘るるは仁人の務めるところなり  
困っている者を見ると、居ても立つてもおられず、あわれみの心が起こるのは観音菩薩の気がかりであり、他者の危険を視れば、自分を投げ出して他者を受け止めようとしてしまうのは、思いやりの心をそなえた人なのだというこ

とです。目の前で苦しむものがあれば、たとえ餓鬼であつてさえ救済してやまないという弘法大師の心より生まれた救いの手立て、それがこの施餓鬼法会なのです。

係ないとばかりに、お喋りしてきますから。今年はずひ、耳を傾けて下さい。そこで語られているのは、次のような目連の物語です。

いかがでしたか？ ぼくのような生臭坊主には、なかなかこういう文章は書けません。

さて、布教師の話が終わると、結衆の僧侶たちによる法要が営まれます。まずは揃つて読経し、そののち「施餓鬼秘法」を修します。その秘法のメインが、施餓鬼という名前の通り、餓鬼に食べ物を施す作法です。真言を唱えながら、器に盛りられたご飯を餓鬼たちに与えるという所作をするわけですが、この秘法に先だつて、法要の趣旨を述べる祭文が読みあげられます。施餓鬼会の祭文なんて、あまり聞いたことありませんよね。みなさん、ここは関

神通力を身につけていた目連は、死んだ母親が餓鬼の世界に墮ち苦しんでいるのを見て、なんとか救いたいと願つた。しかし、母の苦しみを除こうと、いろいろ試したが叶わない。そこで、師である釈迦の教えに従い、僧侶たちが長い修行を終える7月15日、その僧侶たちに食物などの布施したところ、その功德で母親が救われた。また、その他の多くの霊たちも救われ、ともに悟りを得ることができた。

たしかに「餓鬼」という言葉はでてきますが、これは目連さんのいわば親孝行の話で、盆の意味が説かれた『盂蘭盆經』という經典に出てきます。しかし阿難の姿はありません。そして

布教師さんの話には目連の影もない。

実は盆と施餓鬼会は、全く別の法要でした。それがいつしか一体化してしまい、施餓鬼会で盆の物語が語られているわけです。

盆と施餓鬼会が合体するにいたった経緯は不明ですが、『盂蘭盆経』では盆の供養によって餓鬼世界で苦しむ母だけでなく、「七世の父母、六種の親族」たちをも救うことができると思えます。遠い過去の先祖や親族たちも救えるわけです。盆の供養で餓鬼世界の多くの魂を救えるというのですから、盆と施餓鬼が同じものと考えられるようになったのも当然かもしれません。

ともあれ、盆と施餓鬼会の一体化によって、盆供養の対象が先祖の霊魂だけでなく、餓鬼や怨霊、その他さまざまな、幅広い死者たちの霊魂たちにまで広がっ

たわけです。打ち続く戦乱や災害で多くの命が失われ、その慰霊が求められたことが、この一体化の背景にあったのでしょう。

この世に生起する多くの災いが、死んだ霊たちの怨念によるものだと考えられた時代には、慰霊という行為は、為政者たちによって行われるべき政治に他なりません。そして、そういう先祖ではない多くの霊たちを供養することもまた、自分の積む功德であり、先祖たちへの供養にもなるのだと、お坊さんも説くようになったのでしよう。

◆誰のための供物？

冒頭に書きましたように、長谷寺の檀家ではもはや皆無ですが、鳴門市内でも地域によっては、いまでも盆になると玄関先や庭先などの戸外に精霊棚を設けて、供物をまつっている家は少なくありません。僧侶たちはその棚を拜んでまわ

るわけですが。

精霊棚をまつっている家では、ご先祖さまたちを迎えるためにお供えをしているのでしようが、拜んでいるお坊さんたちの中には、戸外にあるのだから餓鬼たちに施す供物の棚と考えている人もいます。

しかし全国的に見れば、地域によってさまざまな精霊棚の祭り方があり、中には、先祖たち、新仏、そして餓鬼仏のためにと、三つの棚を設ける地域もあります。盆と施餓鬼が、民俗の世界でも一体化しているこ

とが見て取れます。

四国では、そういう三種の区別をせずに、まとめて戸外にまつることが多いようです。盆と施餓鬼が一体化しているわけですから、鳴門で設えられる精霊棚は、きつとそういう三種の霊たちすべてを供養の対象にしたものなのでしょう。

◆内と外の狭間に

寺で行われる法要は、年忌の法事でも、盆の供養でも、もちろん大法会でも涅槃会でも、内陣の本尊のそばに位牌や供物をまつり、本尊に向かって拜みます。

しかしこの施餓鬼会だけは、内陣を避けて外陣の、しかも廊下に棚を設けていますが、お気付きでしょうか。相手はなにしろ餓鬼ですから、聖域である内陣に近寄せないようにするためか、あるいは内陣に供え物をしてしまったのでは、餓鬼たちが遠慮してしまつて、せつかくの施しに近寄

らないからなのか。

この棚はいわば大型の精霊棚。祭壇のように見えますが、あくまでも餓鬼に施す供物を置くための棚です。では本尊はどこにおおすのか。施餓鬼会の本尊は、さきの話に出てきた五如来で、棚の周囲に立つ五色の幡に名前を記すのみです。

供物を食べに集まった餓鬼たちが遠慮しないように、そして彼らを守るように、棚の周囲に控えているのかもしれない。



市内、北泊地域の精霊棚。趣向を凝らしたものが多です。(写真提供 井海密雄氏)

〒772-0004  
鳴門市撫養町木津 1037-1  
電話 088-686-2450  
ファクス 088-686-2130  
E-Mail  
cho\_kuma@mwb.biglobe.ne.jp  
URL  
http://www.chokokuji.jp/

長谷寺  
編集 裕信